

# 南山大学外国語学部ドイツ学科「ドイツ語実習」

南山大学外国語学部ドイツ学科講師 林田 雄二

HAYASHIDA Yuji

## 南山大学のドイツ語教育

西暦 2000 年、南山大学文学部独語学独文学科は 50 年の歴史に幕を閉じ、所属名称を外国語学部ドイツ学科と変更し出発した。独語学独文学科には「学生ドイツ語劇」、「ドイツ語弁論・暗誦大会」など幾つかの伝統行事があったが、これらの行事はドイツ学科に継承された。例えば、現在「ドイツ語弁論大会」は全国で最も長い歴史を持ち、今年で 51 回目を迎えるし、「ドイツ語暗誦大会」も 37 回を数える。また、これとは別に開学以来 60 年以上の歴史を持つ「学生ドイツ語劇」がある。

南山大学は、1946 年に設立された南山外国語専門学校、1947 年の名古屋外国語専門学校を経て、1949 年に新制大学として発足した。南山大学の設立母体はカトリック教会の修道会「神言会」で、設立当時の顔ぶれをみるとドイツ人が多い。大学設立以前（外語専門学校）から「語劇祭」が開催され、ドイツ語劇のみならず英語劇も上演され、スペイン語劇、フランス語劇、中国語劇も加わったということである。なぜ南山で外国語劇が盛んだったかという理由は設立母体を見れば推測できる。演劇の発展と宗教の関わりは周知のことである。外国語教育に「語劇」を取り入れるという発想は、当時のドイツ人など、外国人神父たちにとって特別なことでは無かったのだろう。「ドイツ語劇上演会」は旧外専に始まり学園紛争の時代も含めて現在まで続き、数々の文学作品を上演し続けている。これらの催し物は、学科のドイツ語教育の「実習部門」として大変重要な役割を果たしてきた。学科のドイツ語教育の特徴は、大学設立以来、「・聞く力をつけたかったら、読むことを忘れるな、話すことも忘れるな。

・話す力をつけたかったら、聞くことを忘れるな、読むことも忘れるな、書くことも忘れるな。

・書く力をつけたかったら、話すことを忘れるな、従って聴くことも、読むことも忘れるな」<sup>(1)</sup>

というように、話す、聞き、読み、書くというコミュニケーションを構成する諸要素の有機的な繋がりを重視して、総合的なドイツ語教育を目指してきた点である。

## ドイツ語圏留学

創立当時の 1950 年代、60 年代、戦後日本は急速に経済発展を遂げたが、学生がドイツに留学できるほど人々の生活は豊かではなかった。それにもかかわらず、学生をドイツへ長期・短期留学にかかわらず派遣しようという動きは存在したようで、当時、後に学長を務めることになる故ヨハネス・ヒルシュマイヤー教授がドイツ（当時西ドイツ）で学生の受け入れ機関を見つけてきて、「学生全員の基礎ドイツ語教育をまずドイツでやりましょう」と提案して、学科の先生たちを慌てさせたという逸話が残っている。1970 年に入り、アジアと深い関係を持つ西ドイツのある企業から南山大学にド

ドイツ留学のための奨学金を出すという申し出が有り、70年代半ばから2名の学生が、ノルトライン・ウエストファーレン州にあるルール大学（通称・ポッフム大学）に1年間留学出来るようになった。この奨学制度は、ドイツ企業の経営状況の悪化とともに1990年代の初頭に廃止されてしまうが、それまでにその制度を使って留学した人々の中には、現在、企業で中枢の役割を担っている人物や多くの大学教員がいる。奨学金制度が廃止されて以降は、「ロータリークラブ」や「ライオンズクラブ」、さらには「盛田財団」などの奨学金を受けたり、私費で留学する学生が毎年何人かいた。

西暦2000年に南山大学の組織改組が行われ、学科は文学部から外国語学部にドイツ学科の名称で編入された。学科のアドミッションポリシーの一つは、

「異文化理解の素養に加え、文化や価値観の多様性を尊重する態度を養うために、諸外国とりわけドイツ語が話されている国や地域の文化と社会、国際関係について十分な知識を身につけることを目指す強い意欲を持っている人。」

である。

これをもとに学科に入学してきた学生の教育のために、ドイツの大学との交換留学協定締結に向けた本格的な努力が始まった。その努力が実って、2012年現在、ベルリン自由大学、デュッセルドルフ大学、ブレーメン経済工科大学、バンベルク大学との交換協定が成立し、毎年学生を各大学に派遣している。

### 交換留学協定の特色

以前の交換留学協定では、“交換”という名称にもかかわらず、相手校からドイツ人学生が来ることは無く、日本から学生を送るという一方通行の関係であった。しかし、現在交換留学協定を結んでいる大学とは、その大学の日本学科と協力関係を結び、ドイツ人留学生の本学への派遣を要請している。その結果、ブレーメン大学からは、毎年留学生が南山大学へ派遣されている。また、ベルリン自由大学とは、2005年に名古屋で「ツェッペリン・プロジェクト」という名称で、両大学の学生が協働して「日・独異文化研究」作業を5日間にわたって行い素晴らしい成果を収めたが、それが、現在の両大学の交換留学協定に結実している。



Tandem（タンデム）の様子

デュッセルドルフ大学の現代日本学科とは、ドイツ学科が「ドイツ語実習」という名称でデュッセルドルフ市での1ヶ月間の学生短期留学を計画した時点で、関係構築を模索した。その努力は、「インターネットによる遠隔ビデオ共同授業」、その後のTandem（タンデム）という「日・独双方言語による交換授業」に繋がった。

## 「ドイツ語実習」

西暦2000年の大学改組以降、ドイツ学科では、学生のドイツ語能力のスキルアップを目指した1ヶ月余りのドイツに於ける「短期ドイツ語研修」実施の可能性を探ってきた。初期段階においては、旅行代理店の協力を得て、春にボンのゲーテ・インスティテュートに学生を派遣、夏には、ドイツ各大学で開催される「サマーコース」に学生を参加させた。一方、フランス学科では、オルレアン大学と結んで、「フランス語実習」という名称で、春期1ヶ月の短期語学研修を授業科目に組み込むことに成功した。ドイツ学科でもそれに習い、「ドイツ語実習」という名称でドイツ語短期実習を講義科目に繰り入れた。実習場所を決定する際に考慮した点は次の事柄であった。

1. ドイツ語教育の質の高さ
2. 学生の宿泊場所の質の高さ（出来れば質の高いホームステイが望ましい）
3. ドイツ語教育を行う現地教育機関の質の高さ
4. 「実習」が行われる場所の立地条件の良さ

調査の結果、デュッセルドルフ市の「国際コミュニケーション研究所・デュッセルドルフ」(Institut der internationalen Kommunikation, Düsseldorf) (略称IIK)を実習場所を選定した。以下がIIKの選定に際して調査した点である。

### (1) 授業の質の高さ

- ・我々の学生たちのレベルに合った、多様なクラスが準備されているか。  
IIKは、クラスをそれぞれ2クラス設け、1クラスの人数が12名を超えないように配慮している。
- ・クラス編成に際して国籍の偏りを避ける。  
学生たちは、日本人専用の特別クラスではなく、IIKの通常の授業に組み入れられる。
- ・「外国語としてのドイツ語」(DaF)分野の教員の教育・訓練  
IIKでは、ドイツ語教育資格を持つ教員が勤務しているばかりではなく、そのような教員を養成し、継続的な訓練を行う業務にも携わっている。

### (2) 学生の現地宿泊施設の質の高さ

- ・参加学生のドイツ人家庭での滞在  
IIKは、実習参加学生たちに質の高い“ホストファミリー”の斡旋を約束している。

### (3) 現地受け入れ校の質の高さ

- IIKは、DAAD(ドイツ学術交流会)によっても推薦されている定評のある外国語教育機関である。
- IIKは、毎年、DAADの依頼で、そこに勤務する講師たちのための現職講座も開講している。

### (4) 実習の行われる立地に関するアспект

- デュッセルドルフは、学生の研修旅行の場所として極めて好都合な立地にある。
- そこには沢山の日本企業が支社を構えており、大学卒業後ドイツに職を求めようとする学生は、実習滞在中に企業と接触する機会がある。デュッセルドルフは、ノルトライン・ヴェストファーレン州の州都であり、美術館、博物館、コンサートホールなど数多くの文化施設を有し、学生たちは授業以外でも、ドイツ文化について、またドイツ人の生活について学ぶ機会を持つことが出来る。

「ドイツ語実習」は、2008年よりドイツ学科・学科選択科目（定員25名）の一つとして開講され、翌09年3月に第一回「ドイツ語実習」が実施された。

「ドイツ語実習」の核になるのは、ドイツ文化体験とドイツ語学習であるが、それをサポートするものとして3点を挙げたい。一つは、学生の家庭滞在である。学生のホームステイについては、受け入れ先家族の“質の違い”やトラブルを心配したが、IHKは、私たちの希望に添う形で、学生たちに最良の家庭を斡旋してくれている。次に、フィールドワークである。実習前の10回に及ぶ「事前授業」で、実習参加者はドイツ文化に関するテーマを決め、それについて研究発表をする。更にそのテーマを深化させるために、ドイツでのフィールドワークの計画を立てる。ドイツで調査された結果は、実習の後に「研究レポート」という形で提出されなければならない。もう一つは、デュッセルドルフ大学・現代日本学科学生とのタンデム（日・独両言語による交換授業）である。当方の学生は、週1回3時間ほど行われるタンデムで初めてドイツ人学生との議論の機会をもつことになる。

### 「南山大学国際化推進事業」と「外国語学部国際化推進事業」

2009年に南山大学は、大学の国際化を更に推進するために「南山大学国際化推進事業」を立ち上げ各学部事業への申請を呼びかけた。外国語学部はすぐに応じ、「外国語学部国際化推進事業：双方向的循環型海外実習と現地体験型外国研究推進プログラム」という名称で大学に事業計画書を提出し、採択された。このプログラムは、外国語学部で実施されている短期海外研修プログラムの内容を大幅に改変、拡充し、それを核として学科カリキュラムの拡充をはかり、学生の外国語能力をとりわけ発信力の育成という観点から向上させると同時に、文献研究に終始しない現地体験型の「外国研究の実践」を学生に促すというものである。

「ドイツ語実習」も「国際化推進事業」の一部として、学部より経済的な支援を受けられるようになった。学科では、既存の実習計画を充実させ、一つ一つを確実に実行していくことに重点を置くことにした。更に、「双方向循環型」という意味で、ドイツの提携先大学から2名の学生を南山大学に招待することを計画し申請が受理された。外国語学部は2名の学生の渡航費用のみを負担するが、学科では彼らの滞在経費を軽減するためにホームステイの斡旋を行い、招待学生は平均3ヶ月ほど名古屋に滞在し、学科の講義科目参加やサポート、「ドイツ語劇」、「ドイツ語弁論・暗誦大会」の手伝いなどを行うことになった。彼らは沢山の日本人学生と接触を持ち、それによって日本語と日本文化を習得して帰国している。

さらに、2010年度日本学生支援機構(JASSO)の「留学生交流支援制度(ショートビジット)プログラム」への申請が認められたことは、「ドイツ語実習」の充実に大きな役割を果たしている。

一つは、参加者選考に際しての選考方法の明確化である。「ドイツ語実習」は、25名の定員枠を設けているが、あくまで学科の履修科目であり学生全員に履修登録の権利がある。それ故毎年25名の選考に際して問題を抱えていた。しかし、ショートビジット奨学金の取得により、参加者の選考方法を明確化することが出来るようになった。選考は、次の1、2、3を総合的に判断して行うこととした。

1. ドイツ語科目の成績
2. 200ページ以上のドイツ関連図書を3冊読み、それぞれについてレポートを提出する。
3. 「ドイツ語実習参加志望動機書」を提出する。

今年度は、25名の募集に対して47名の応募があった。「読書レポート」、「志望動機書」を含めて、非常にレベルが高かった。

さらに、実習事後の成果検証のために、ドイツ語学文学振興会が実施している「ドイツ語技能検定」かゲーテ・インスティトゥートが行う「ドイツ語検定試験」を参加者全員に受験させることにした。ゲーテの「ドイツ語検定試験」に関しては、試験会場が東京、関西にしか無かったために、2011年に試験会場を南山大学に誘致し、学生の便宜を図っている。

### 「ドイツ語実習」の成果

「ドイツ語実習」が終了すると、学生には、フィールドワークのレポートとは別に2種類の文書の提出を義務付けている。一つは、授業、ホームステイ、滞在地、衣食住、滞在費用などに関するアンケート形式のものであり、もう一つは、来年度以降「実習」に参加する学生に向けた助言である。最初のアンケートのデーターは、一部、IHKにも伝えられ、次年度以降の実習に生かされる。もう一つの助言は、学科作成の「実習」のホームページに掲載される。これらのアンケート結果を見て目につくのは、「ドイツ人がとても親切だった」というような感嘆の言葉である。ホームステイ先のドイツ人だけではなく、町で出会うドイツ人も、「道を尋ねれば大変親切に教えてくれる」、「大きな荷物を抱えていると、階段などですぐに助けてくれる」などである。初めて海外生活を体験し、ドイツ語授業ばかりか日常の生活でも大なり小なりストレスを感じている多くの学生にとって、滞在地の“人間環境”が良いというのは大変助けになる。ドイツ語の授業については、「沢山のことを学んだ」という絶対的な満足感はあるものの、「もっとドイツ語が出来れば」という後悔が殆どの学生の回答に見られる。さらには、「最初、他の外国人学生たちの会話量に圧倒されたが、話さなければ誰も見向いてくれないので、自分も最後は会話の渦に入り、一生懸命に話していた」などという赤裸々な体験も見いだされる。「ドイツ語実習」においては、IHKでの人間関係と同様に、タンデム（日独交換授業）で知り合ったドイツ人学生たちとの交流も、学生たちのドイツ滞在にプラスの影響を及ぼしている。タンデムは、日本の幾つかの大学で実験的に行われているが、日独学生間の言語能力の差（ドイツ人学生の日本語能力が総じて高い）が災いして成功例が少ない。「実習」では、デュッセルドルフ大学側の担当教員と言語能力レベルについては十分な情



ライン川河畔



2011年のカーニバル

報交換をしてグループ分けをした結果、素晴らしい成果を上げている、また、「外国語学部国際化事業」で日本に招待された学生たちが、南山生の実習滞在を色々サポートしてくれているというのも嬉しい点である。更に、「実習参加志望動機」には、「前年度の実習に参加した学友たちが、たった1ヶ月で、言動も振る舞いも、学習態度もすごく変わったように感じる。それで、是非自分も参加したい」というような意見も散見される。「実習」は、参加者本人ばかりか、周囲の学生にも良い影響を与えている。

ドイツ語は、人口8200万余りのドイツは言うに及ばず、隣国オーストリア（人口約800万人）や、スイス（人口約700万人）国民の75%が母語にしている。その他、リヒテンシュタイン、ルクセンブルクの一部などを合計すると約1億2000万人がドイツ語を話している

ると言われている。ドイツ人カール・マルクスの社会主義思想を国家理念にしていた東欧諸国の知識人言語はドイツ語である。また、現在では、インターネット使用人口の約3%がドイツ語（外国語第6位）であり、ウェブページ数における全サイトの内約6%がドイツ語のページ（英語に次ぐ2位）であるというデータもある。更に世界経済面では、近年のユーロ危機で、欧州に於けるドイツの中心的役割が再確認された。今後ますますドイツとドイツ語の重要性は増大するであろう。

実習中、在独・日本商工会議所を訪れて、ドイツの日本企業についての話を聞くことにしているが、ある学生から会議所の所長に、「日本では、英語教育ばかりが強調されて、英語以外の外国語は肩身が狭い。ドイツ語は本当に役に立つのか」という切実な質問があった。所長は、「デュッセルドルフには、今でも新しく事務所を開設しようとする日本企業がある。しかし、大抵の場合、社員は英語しか出来ない。そのような企業は、得る物がないと考えすぐに撤退する。ドイツはヨーロッパ経済・文化の中心で有り、様々な技術があり、革新的なアイデアが眠っている。しかし、そのようなアイデアの詳細は、実はほとんどがドイツ語で発信されている。英語は必要だが、それだけでは全く足りない。」と答えられ、学生は納得した。

### ドイツ語実習の課題

「ドイツ語実習」だけではなく、このような海外研修プログラムには課題もある。一番重要な問題は、学生の安全である。ケガや病気に関しては、2011年度より、それまで個人個人バラバラだった保険内容を学部で統一し、学生に対して海外研修に十分対応できる内容を持った保険に加入させるようにした。しかし、もう一つ大きな問題がある。それは引率教員の責任の問題である。当然のことながら、「実習」の事前準備

では滞在中の安全面での指導は十分に行っている。しかし、万全を尽くしたと思っても何が起こるか予測がつかない。事故が起こった場合の対応については、大学の緊急事態マニュアルがあるが、その後、引率教員の責任が問われた場合の対応がはっきりしない。事前授業で何を、どこまでやれば良いのかわからない状態では、教員に精神的な負担がかかりすぎて、引率という仕事が過重になってしまう。外国語学部では、これに関して専門化を招いて講演会を開いた。しかし、さらなる体制作りが必要であろう。

#### 引用文献

- (1) 近江誠：頭と心と体を使う 英語の学び方（研究社出版） 1997, P. 210